

平成 30 年度東播磨地域夢会議（H30. 12. 1）議事録

2 全体発表・講評

（5 テーブル）



私たち5テーブルでは、稲美町と播磨町が合併した“東はりま市”の設置や、教育制度を充実させるために中学校までの学校給食費の無償化、親子で楽しめる大型児童館の充実のほか、東播磨地域は姫路市までの“通り過ぎる街”という雰囲気がある中、“通り過ぎる街にしない”ためにPRポイントを作る、例えば東播磨全域で、明石市の明石焼や加古川市のかつめし、高砂市のにくてんのようなB級グルメを考案するとともに、大型商業施設で地域農林水産物をPRする、このような意見が出ました。

（2 テーブル）

私たち2テーブルでは、2030年までに“東はりま100万都市”をめざすという意見が出ました。そのために、1つは“子育て”が挙げられ、少子高齢化の影響により、地域で増えている空き家を有効活用するというものでした。もう1つは、高齢化が進む中、自動車に乗れず、移動手段がない人もいるため、“交通の充実”を望むとのことでした。



（10 テーブル）



私たち10テーブルでは、仕事面での情報発信や近所同士の交流、空き家の活用、大型商業施設による活性化、Iターン者などを受け入れる雰囲気づくりなど、主に人間関係の意見が多く出ました。

(12 テーブル)

私たち 12 テーブルでは、みんなが仲良くなるということが重要だという意見が出ました。他県や他市の意見を否定するだけではなく、まずは肯定することが大切だと思います。また、学生などの若い世代の人が意見交換できる場所をもっと増やしていくべきだと思います。県や市の意見だけではなく、その若い世代の人たちの意見を発信していくべきだと思います。



(6 テーブル)



6 テーブルでは、空き家問題について意見が出ました。共働きの家庭が多い今、子どもを預ける保育園が不足しているため、空き屋をデイサービスなどにリノベーションし、独居老人に通っていただき、子どもたちとふれあう場所を作れば良いという意見でした。

(4 テーブル)

4 テーブルでは、すべての住民が暮らしやすい街にする、そのために暮らしやすい環境をつくるという意見が出ました。もちろん、他のテーブルで出た意見も大事ですが、これが大前提だと感じています。今住んでいる人、将来移住してくる人、すべての人が暮らしやすい環境を、私たちがつくる必要があると感じました。



(コメンテーター 田端 和彦 兵庫大学副学長)



皆さん、お疲れ様でした。まず、神戸学院人文学部人文学科矢嶋ゼミのご報告を覚えていらっしゃいますでしょうか。調査で分かったことを一言でいうと、“持続可能性が低いかも”ということですよ。もう1つ、金澤副知事からご説明いただいた「兵庫 2030 年の展望」の「課題解決が進まない場合」をご覧ください。ここも一言でいうと、“縮

小均衡はあり得ない” “小さくなっていくことは崩壊の一步” であるということが記されています。これらの2つを組み合わせると、地域を維持しようと思えば、縮小したら負けになるかもしれない、そういうことだと思いました。そう考えると、例えば“東はりま市”を設置するということは、縮小ではなく大きくまとまって頑張ろう、“100 万人都市”をめざそう、そのために人を受け入れられる仕組みや、子どものための仕組みを考えようという議論がなされ、あるいは公共交通機関の必要性も出ました。それが1つと思います。もう1つは、縮小したとしても、「地方消滅」という本が発行されましたが、地方は消滅しませんよね。何が消滅するかというと、自治体が消滅するわけです。人々は残る。そうした風に考えると、人間の力を強めたら良いということで、例えば“仲良くする”、人々の力を最大限発揮するために地域にある“空き家をリノベーションする”という意見が出たという風に思っています。前半は政策的なものがありますが、後半の人と人の力を近づけるということは、今後の大きな課題です。「人生 100 年時代構想」などでは、まさに一人ひとりの生産性向上や生きがい創造を検討していますので、そうした方向性は端々で可能という風に思っています。ただし、繰り返しになりますが、縮小均衡はあり得ないと考えるならば、やはり広げていかないと、兵庫県がなくなり大阪府になってしまいますので、皆さんと力を合わせて頑張っていたきたいと思えます。ありがとうございました。

(コメンテーター 和田 真理子 兵庫県立大学政策科学研究所准教授)

皆さん、熱心なご議論お疲れ様でした。まずは、こちらから指名することなく、積極的に発表されたことに大きな希望を感じました。田端先生が大きな視点で講評されましたので、私からは各論的にお話ししたいと思います。先ほどの全体発表で、複数のテーブルから“空き家”の話が出ました。空き家のリノベーションは、発表されなかったテーブルでもよく見かけるキーワードでした。また、



副知事からの説明に「二地域居住」という言葉がありました。「耕作放棄地」という農業に使われない土地のお話もありましたが、要するに日本全体で人口が減少しているのに、土地が余っている、余りつつある現象だと思えます。一方、駅前ではタワーマンションが建てられています。駅前はそれで良いかもしれませんが、土地が余ってきているのに、密度を高くしすぎることは問題で、二地域居住は結局、そういうことだと思えますが、一人ができるだけ多くの土地や建物に関わることが重要ではないかと思うわけです。このことについて、全体発表でアイデアも出されまして、例えば古民家や空き家をデイサービスに活用するというアイデアや、地域における交流の場にするすることで地域のつながりを強くするという1つの方向が出てきていました。活性化拠点という考え方も出ていたように思います。はっきりと出てこなかったかもしれませんが、広域的に考えて新しい人を呼び込むという視点も重要ではないかと思えます。また、“通り過ぎる街にしない”という言葉は、特に刺さったキーワードでした。通り過ぎない街にする、つまり通る人はいるということ

ですよ。したがって、その通る人が上手く引っかかってくれる、そうした引っかかりを地域で作っていくということが重要だと思っています。引っかかりは結局、コミュニティ内も上手につながりができていなければ、作ることができません。その基礎の上に、枝が外側に伸びていくと思いますので、余ったスペースを活用して、どんどん地域における中のつながりを増やして、外に張り出す枝葉を広げていただけたら良いかなと思いつつ聞いていました。

(コメンテーター 金澤 和夫 兵庫県副知事)



皆さん、長丁場お疲れ様でした。「兵庫 2030 年の展望」を策定する作業や、今回のように説明して紹介する、これらのプロセスを通じていろいろ感じることは、少なくとも 12 年先という干支のサイクル程度で展望しようとしたときに、確実に言えることはずいぶん少ない、という感じを持っています。もちろん、確実なこともいくつかあって、人口が減ることは絶対に確実です。あるいは、寿命が伸びることや、技術が進歩することも、確実にそうなると思います。空き地や空き家が増えることもそうですが、絶対にそうなるだろうということは、むしろ限られていて、「兵庫 2030 年の展望」に記された事柄にも、流動的な要素や不確定要素が多いという風に思います。それは、国際情勢など、他のいろいろな外部条件で変わっていくものがあるとともに、私たちが選択することで変わり得るものもあります。いずれにしても、12 年という干支のサイクルで展望する限りでは、未来は可変的なものという気がしています。そういう点から言うと、“東播磨 100 万都市構想”はまさに夢があつていいなと思います。完全にそのとおり実現するかどうかは棚上げでも、“こうありたい”という目標を持って取り組むこと自体が、未来に対して何らかの影響与え得ることは、私たち行政はもちろん、住んでいらっしゃる県民の皆さんお一人おひとりも、そうした想いを持って、これからの社会づくりに臨むべきではないか、そういう気がしています。もちろん、行政は必要な施策をリストアップして実施していきます。しかしながら同時に、周囲の状況が日々変わりつつありますので、同じ施策をずっと実施するわけではなく、いつも柔軟に微調整をしながら、場合によっては、今までやってきたことを引っ込めて、もう一度別の角度からやり直すという弾力的な仕事のやり方がますます重要になっていく気がしています。そのときに大事なことは、世の中で何が起きているかという感受性です。要するにアンテナを高くして、敏感に世の中で真っ先に変わるものをきちんと捕まえる必要があります。また、それを捕まえるために、本日の出席者は多世代にわたっていますが、若い人たちは何を考えているか、どういう暮らしをしているか、高齢者が今何に困っているか、直面しているか、こういうものを満遍なく拾い上げる必要があるとともに、多様性という点から言えば、外国人はどれぐらい住んでいて、何に苦勞しているか、これも大事な情報である可能性があります。また、引きこもる人は今、兵庫県で何人ぐらいいて、どのぐらいの年齢の人がい

て、どんなことに困っているか、これも大事な情報です。したがって、いろいろな人の多様な情報、いわゆるダイバーシティがものすごく大事な要素になる気がしています。それは、皆さんの発表には関係なく、私自身が「兵庫 2030 年の展望」に関わって抱いた想いです。本日、皆さんのお話を聞いてきて、テーブルごとに、まさに世代を超えて、リラックスした雰囲気でお話しされて良かったと思っています。実を言えば、私が着目していたことは、「兵庫 2030 年の展望」にはいろいろなことが記されているわけですが、その中でどの分野が皆さんの関心を引くか、例えば高齢化の問題、健康長寿、外国人が流入し世の中はどう変わるか、あるいは空き地や空き家をどう活用するかなど、どの分野が議論の興味感心を引くか、大変関心を持っていましたが、少なくとも発表された限りでは万遍なく、皆さんの関心領域はやはりそれぞれという風に思いました。さらにもう 1 つ、この作業を通じて、おそらく皆さん心の底でどこかに考えていらっしやると思いますが、本当の幸せって何だろうということを考える機会になっていただければ良いという風に思います。人口が減っていくことが不幸せであるか、寿命が延びていくことが幸せであるか、あるいは多様な働き方がこれから許されるようになります。許されるとは本当に幸せであるか、自分で選ばなければなりません。それが自分の生き方として本当に幸せにつながるものか、技術が進歩して自動運転が普及する、これは自分の生活にとって幸せにつながるものか、そういうことを考える 1 つのきっかけになったのではないかと思います。なったとしたら良いことではないかという風に思います。こういう未来予測のようなものは、どちらかと言えば、住民の想いや気持ちに関係なく、こうなるだろうと記されることが多いですが、その中で自分の人生として、どういうものが幸せな人生であるか、そこまで掘り下げないと、本当の 2030 年の展望にはならないだろうと思います。皆さんそれぞれにおける心の 2030 年の展望というものが本来あるべき姿で、そういうことを考える取っ掛かりにさせていただくことができれば、「兵庫 2030 年の展望」はそれなりの意味があるものと思います。それにしても本当に長時間、狭い部屋の中で、皆さんのエネルギーを十分に使っていただき、大いなる成果を上げることができたと思います。ご協力いただいた皆さんに、あらためて敬意を表し、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(ファシリテーター 相川 康子 特定非営利活動法人 NPO 政策研究所専務理事)

田端先生から、プレゼンテーション発表も交えて、“持続可能性”や“縮小の懸念”というお話がありました。“東はりま市”というスケールメリットを生かす方策があるとともに、縮小しても暮らしが成り立つ方策を考えることも方向性である、例えば空き家の活用などは、全体発表にもありましたが、潜在的な人材、“人の宝”と言う方が良いかもしれませんね。潜在的な人材を発掘するためにはどうすればいいのか。自治会役員の皆さんは今、クタクタになっていますが、じゃあどうすれば、新しい人、例えば地域に将来移住してくる人や若い人が、地域の担い手にな



ってくれるか、新しく考える課題が挙がると思っています。

和田先生からは、自発的な発言に希望を感じたと同時に、空き家や耕作放棄地がある一方、駅前のタワーマンションが建てられています。都市のスポンジ化と言うのでしょうか、二極分化が進んでいます。そうした中、「兵庫 2030 年の展望」にも記されていた「二地域居住」、これは一人の人間がどれほど多くの土地と建物に関わるか、居住地以外にもう 1 つふるさとを持つなど、関わりを増やすことで網目を張っていくという話だったと思います。空き家についても、2 つの活用方法として、1 つは“地域で使いこなす”、例えばカフェを開業するなど、施策として生かすと同時に、外に打って出るための活性化拠点として活用する必要もあるのではないかと、人を呼び込む拠点としての利用もできるのではないかとということでした。“通り過ぎる街にしない”という言葉が刺さったとおっしゃいましたが、まだ通ってくれるだけ良いですね。通る人をどうやって引き込むか、外の人へのおもてなしだけだったら、中の人が疲れてしまいますので、中の人も楽しめる仕掛けを考えられないかということだったと思います。

金澤副知事は今、「兵庫 2030 年の展望」について説明するプロセスを踏まれています、この未来予測は何のためのものか、というお話をされたと思います。人口減少や空き地、空き家が増えることは確実ですが、大部分は不確実で、外部条件で変わることがあるとともに、私たちが選択する、目標に向かって意識して活動することで、変えていくことの方が大きいのではないかと。そういう意味では、“東播磨 100 万都市構想”を掲げて、みんなで力を合わせることは良いビジョンであるとともに、夢を持って進めることが、将来に影響を与えるということでした。県政においても今、選択と集中を兼ねて、取組の方向性を挙げられていますが、いちばん大事なことは、決めてからの微調整、この微調整には鋭利なアンテナ、例えば世の中の動きや、多世代からの声、その中には多様性など、声を上げることができない社会的弱者の意見もきちんと聞く、そういうアンテナを持って微調整していく大切さをおっしゃいました。

最後になりますが、「兵庫 2030 年の展望」やワールドカフェという結論が出ない会議では、幸せとは何か、活性化とは何かということについて、誰も答えを持っているわけではありません。高度経済成長期のように、明日は今日より良くなるという夢を、みんなが持っているわけではありません。そういう時代においては、いろいろある中で自分が選ぶ、誰かに言われたからではなく自分が納得して、私たちはどうするかを決断することが、非常に大切なことではないかと思っています。ワールドカフェという手法は結論を出しませんが、2 時間の講演を聞くよりも、対話を通じて腑に落とすことができたのではないかと思っています。ただし、結論は出ていませんので、共感したことや、どうしても違和感があること、全部持ち帰っていただき、これからの 1、2 年、それこそ 2030 年まで悩み続けて、あるいは希望を持ち続けていただければ良いのではないかと思っています。ありがとうございました。